

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	母音交替と特殊仮名遣いについて
Author(s)	クスタース ハリ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1996 : 37 - 47
Issue Date	1997-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039545
Right	
Relation	



母音交替と特殊仮名遣いについて

クスターズ ハリ

1 初めに

現在の日本語の表記法というのは漢字、平仮名或いは片仮名である。しかし、周知の如く上代にはそうではなかった。日本の古い文献を調べると古事記、日本書紀、万葉集などが万葉仮名と呼ばれる表記法で書かれている。万葉仮名とは中国から借用された漢字であり日本にはまだ表記法がないため大体音を現す媒体として用いられた。本文の研究の対象が十分に理解出来るように先ず特殊仮名遣、つまり万葉仮名の使い方、と母音交替の使用についての通時的な研究とその結果を取り上げ続いて、特殊仮名遣と母音交替という現象を説明したいと思う。

2 特殊仮名遣とは

特殊仮名遣は何であるかという問題に入るに先立って仮名遣とその研究について説明しておきたい。仮名遣というのは「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」、「お」と「を」との漢字の使い分けである。以上の音は一つの音に一つの漢字のみ用いられ厳密に使い分けられていて混同していなかった。本居宣長は古事記によって日本語にある清音と濁音を対象とし初めて同音に二つ以上の別の漢字があることに気付いた。この現象を深く研究したのは本居氏の弟子たる石塚龍麿であった。石塚氏が他の奈良朝の文献によって本居氏の研究を続けて同じことに気付いた。石塚氏がこの同音に二つ以上の別の漢字がある十三音を二類に分けて混同しないという規則を発見した。この漢字の使い分けがある十三音は次の通りである：エキケコソトノヒヘミメヨロとその獨音。「仮名遣奥山路」(1799以前)に書いてある石塚氏の発見は長く認められなかった。なぜならこの発見は新事実であり、この事実は完備していなかったし、取り上げられた例は例外と間違いで一杯であったから。後に橋本進吉は自分の研究を通して同音の漢字の使い分けを再発見した。橋本氏は漢字の使い分けがある十三音から「え」を抜いて十二音にした。「え」には二つの漢字があったけれども、これは同音の使い分けよりむしろ「e」と「ye」の使い分けの表れであった。ここで、橋本氏は音を表す万葉仮名を仮名遣と特殊仮名遣に分け名付けた。仮名遣というのは同じ音ではない場合に違う万葉仮名が用いられ混同しないことであり特殊仮名遣というのは同音の場合に違う万葉仮名を使用することである。橋本氏はこれを初めて特殊仮名遣と名付けた。一つの類を甲、もう一つを乙と名付け、その違いは音韻に基づくと推定した。

例を挙げれば

(ここに出てくる万葉仮名は万葉集からである。)

仮名遣 「え」/e/ 衣愛依・得荏覆という漢字で書かれた。
 「え」/ye/ 延要遥曳叡・兄江枝吉という漢字で書かれた。
 (注・の前は音読み、・の後は訓読み)²

えみし(夷)を万葉仮名で表記すれば「え」は「衣」で記す：<衣比須>(靈異記)。
 /e/の音を表す「愛、依」で書いてもよからう。だが/ye/の音を表す万葉仮名で表記してはいけない。次いで、えだ(枝)の「え」は/ye/の音を表す万葉仮名で書かれ、「延」など、/e/の音を表す万葉仮名で記してはいけない。

特殊仮名遣 「き」 甲類：伎岐枳企吉支棄・来寸杵服という漢字で書かれていた。
 乙類：紀記騎奇寄綺貴・樹木城という漢字で書かれていた。²

もしある単語の一つの音節がある類で表記されるなら、甲類にしろ乙類にしろ、残りの音節も同じ類を表す万葉仮名で記す。

1) 日本の言語学、第七巻、264頁

2) 古語大辞典、1837頁

(2)

例えば「きみ」(君)という単語の「き」は甲類であり万葉集を調べてみたら「きみ」は<伎美>というふうに記してある。甲類を表す他の万葉仮名で記してもよからう。

しかし乙類を表す万葉仮名で記してはならない。ある場合だけに同じ所に甲類の代わりに乙類が記述されていた。それは母音交替と言い、もし発音が変わっていったらその発音を表す仮名も変わる。母音交替のことを後で詳しく説明する。奈良朝の文献には間違いがないと思われていたのに注意すべきところが多々ある。一つは東国方言の存在である。大和地方(関西)で通用した言葉は中央方言と呼ばれその法則が地元の人に厳密に守られていた。これに反して東国(関東)の人が万葉仮名の語法詳しく知らなくて間違ったところもある。もう一つは奈良時代に著者が万葉仮名の法則を守ったけれども平安時代に入ると万葉仮名の使い分けが乱れてきたことである。そのために平安時代に書き直された奈良時代の文献の中では万葉仮名の書き分けが間違っている。それに例外もある。著者の間違い、外来語や新しい単語などはその可能性である。

3 特殊仮名の音価の推定

当初は特殊仮名の音価は母音の差に基づいていると思われていた(橋本氏、有坂氏)。しかし不自然な母音体系が生じるため特殊仮名遣が子音の発音に基づくという議論が現れた。勿論この二つの説に限らず他の可能性も検討されている。もっと深く説明する前に先ず日本語の母音の数によって分けられる学説を紹介しよう。昔から日本語にあった母音の数に対しての説は大ざっぱに二つの学説に分けられる。それは五母音説と八母音説である。特殊仮名の研究の初めには同じ音節に違う仮名の使用は母音の相違に基づいたと思われてア、ウ及び甲類のエ、イとオに乙類のエ、イ、オ、合わせて八つと仮定された。この説の先駆者と言える橋本氏、有坂氏や大野氏がこの考え方を支持する。この説によれば母音ずつに別の音価それとも発音がなければならぬ。これに対して五母音説がある(松本氏、John Bradford Whitman、Unger、Lange)。八母音説の場合には母音体系が問題になった。そこで子音の方が特殊仮名遣の理由ではないかという議論が起った。この説によれば母音は現代日本語と同じ五つである。この説を支持する松本その一人には母音がどういふふう発展して日本語の母音がそのまま発音される証拠を調べなければならぬ。

3-1 母音に基づく学説について

さて、最初に母音の発音の相違に基づて甲類乙類の使い方を説明する学説を説明する。草鹿砥宣隆氏が「吉書別音抄」に初めて甲類乙類の使い方と音韻の関連を推定し甲類の万葉仮名と乙類の万葉仮名の発音は違う可能性があると主張した³⁾但し、橋本氏は石塚氏の「仮名遣奥山路」を研究してから音韻に基づく甲類乙類の相違を研究した。橋本氏の日本語の母音の表は次のようになる。

橋本氏の日本語の母音の音価推定⁴⁾
a 甲 i 甲 e 甲 o 甲
u 乙 i i 乙 ue 乙 ð

橋本氏が特殊仮名を二類に分割した時、一つを甲類ともう一つを乙類と名付けた。国際的な研究のために特殊仮名をローマ字で表せたため甲類が無標で乙類が有標になった。有標を表す記号として最初にウムラウトが使用された。しかし、音声学界ではウムラウトが中舌化の記号として使われ乙類の母音が甲類の母音の中舌化と誤解された。橋本氏が一時的に特殊仮名の区別を甲類と乙類と名付けたのに、多くの学者に誤解されてその学者が迷ったり間違った結論を付けたりしていた。

もう一つの甲類乙類を表す方法は甲類に小さい1を乙類に小さい2を付けることである。でも、その時にどちらが二次的な発展であったかまだ明確ではなかった。だから、この方法によっても最初に甲類母音があってそれから乙類母音が出来たと思われていた。しかし研究が進歩して逆ではないか、即ち甲類母音が乙類母音から発展した、と考えるようになった(服部氏、カールグレン氏、ローランド・ラング氏)⁵⁾

特殊仮名の甲類乙類の表せる方法

e₁ e₂ e è
i₁ i₂ i i̇
o₁ o₂ o ò

3) 「日本の言語学」第七巻、214頁

4) 「言語研究」96(1989)、23~42

5) 「言語研究」96(1989)27頁

以上に書いてある橋本氏の日本語の母音の音価推定についての表は、この甲類乙類の記号と関係なく別の音声的な研究に基づく。

橋本氏の研究に従って他の学者も上代日本語の母音の発音をめぐって研究し始めた。

八母音説を支持する学者の上代語の母音の音価推定を見てみよう。

第一図：母音の音価推定 6

	/i/	/i̯/	/e/	/e̯/	/o/	/ø/
橋本進吉	-i	-i̯	-e	-e̯/-æ	-o	-ø
S. ヨシタケ	-i	-i	-e	-e	-o	-ɔ (他に i と ø が中立)
安田喜代門	-i	-i̯	-e	-e	-o(close)/-u(open)	-o
金田一京助	-i	-i̯	-e	-e̯	-o	-ø (乙類は央母音)
有坂秀世	-i	-i̯	-e	-æe/-æj	-o	-ø (ø は央, 円唇母音)
大野 晋	-i	-i̯	-e	-e	-o	-ø (e は央, ø は円唇母音)

この表を見ると、ここ推定された上代語の母音の音価は橋本氏の研究とあまり違わないことが明らかになる。しかし、橋本氏の弟子であった有坂氏と服部氏は上代語の母音の音価を音声的に深く研究していた。有坂氏は八母音説を支持するけれども、彼の母音の音価を見ると i 乙類と e 乙類の下に口蓋化の記号が見える。

有坂の上代語母音音価推定

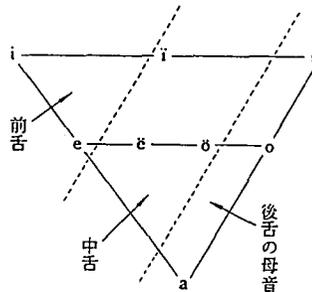
甲 a u i e o
乙 i̯ e̯ ø

口蓋化とは子音に、渡り音 [-j-] のような発音が付加されることを表す。この音価推定は、甲類と乙類の差を子音の口蓋化とする五母音説の学者に近いといえる。

この子音の口蓋化を取り上げる前に、先ず八母音説の上代語の母音音価推定が八母音説に対する学者（橋本氏、服部氏）には満足出来ない理由を説明しよう。

もし上代語に母音が八つがあったとしたら、そしてその母音を全部母音体系に入れておいたら上代語母音体系が次のようになる。

第二図：八母音説の母音体系 8



一番上に書いてある母音を高母音、中が中母音その下を低母音という。言語の普遍的法則として中母音は高母音より少なく、低母音は中母音より少ない。しかし、この体系では中母音が高母音より多く、あり得ない母音体系になる。

このために甲類と乙類の差が母音ではなく子音を理由とする研究が開始した。

6) 「言語研究」96 (1989)、26頁

7) 「言語研究」96 (1989)、30頁

8) 大野進「古代日本語と朝鮮語」、東京(1975)、23頁

3-2 子音に基づく学説

この説は、甲類乙類の差がエ段、イ段とオ段と考え、現象によって生じた。この説を支持する学者は甲類乙類の差が子音に基づくエ段とイ段の場合、口蓋化の差異だと主張した。音声学的傾向として子音の後ろに「i」、が現れると前の子音は口蓋化される。前舌子音は調音点が変わり後舌子音は前に移る。例えば「ka」の「a」の変わりに「i」を付ければ「ki」なり

「k」の発音は「ka」より前の方に移る。

上代語に起きた口蓋化を説明するために古代から母音の発達を見てみよう。

母音の発達過程⁹⁾

$o_1 + i_1 > uy$	合流して	$i_1 + a > ye$	合流して
$u + i_1 > uy$	イ乙類	$i_1 + o_1 > ye$	エ甲類
$a + i_1 > ey$	合流して	$u + a > wo$	合流して
$o_1 + i_1 > ey$	エ乙類	$u + o_1 > wo$	オ甲類

注 (>の右側に出て来る母音が新しく出来た母音であり左側に出て来る母音が古代日本語の母音である。) 以上の表をよく見ると古代日本語の母音は次の通りである:

オ乙類、イ甲類、ウ、ア、合わせて四つ。新しく出来た母音も四つである。新しいイ乙類、エ甲類とエ乙類が出来ると前にオ甲類が出来たと考えられる。

甲類乙類が八母音説を支持する学者の名付けであるから、これを無視して残るのが五母音だけである。以上の表を見ると左と右の違いは母音ではなく半母音(w, y)である。

$o + i$ の組み合わせから新しく母音「i」が出来ても、もう古代に「i」あったから新しい母音にならない。新しく発生した母音はただ一つ、つまり「e」であり、前にあった四つの母音「a, i, u, o」と合わせて五つになる。

それでは以上の知識に基づいて甲類乙類の差を説明しよう。

以上の母音の発達過程を見るとエ段に二つのエが発生したようである。つまり甲類「ye」と乙類「ey」。

この説は、甲類乙類の差が母音に基づくという説と違い、母音だけでなくその差が音節全体に影響があると考える。だから母音の発達過程でなく甲類乙類の差が出て来る音節の発達過程を見てみよう。甲類乙類の差が現れる音節は全部同じように発展するので、ここでは「ke」と「ki」の例だけを取り上げよう。

ケ甲類になった古代の音節をローマ字で記すと「kia」になる。「k」が「i」の影響で口蓋化され同時に「i」と「a」の組み合わせが/e/と発音される。それで「kia」という音節は/kje/と発音する。

ケ乙類になった古代の音節をローマ字で書くと「kai」になる。「k」の直後に「i」が付いていないので口蓋化が起こらない。「ia」も/e/と発音するようになるから「kai」を/ke/と発音する。

「ki」の発展は「ke」と違う。最初にキ乙類が「kōi」と「kui」から発展して/kji/と発音され、その後、キ甲類がキ乙類の口蓋化した結果に発生した:

/kji/。¹⁰⁾

続いてオ段の甲類乙類の差。エ段とイ段と違いオ段の場合にはその差が口蓋化と関係はない。ある学者によれば古代の日本語には母音で始まる単語が珍しかったので、最初にオ段乙類「wo」があったとして、この音節から甲類の「o」が発生したものとする。

他の学者によればオ段甲類「wo」が昔からあったオ段乙類「o」とウ段「u」の組み合わせから発生した。オ段乙類が曖昧母音であり、オ甲類の方が二重母音であると思われる。

3-3 服部氏の六母音説

八母音説を支持していた服部氏は後に意見が変えた。その理由と説明するために有坂氏と服部氏の母音の音価推定を見てみよう。

	甲	乙		乙	甲
有坂氏	ki	k̄i	服部	ki	k̄ji
	ke	k̄e		ke	k̄je

注 (有坂氏と服部氏は、甲類と乙類のどちらが初めにあったかという問題に対して意見が反対なので、この表の甲と乙のも逆であることに注意されたい。)

9) 「The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean」、J. B. Whitman、(1985)、Harvard.

10) 「日本の言語学」第七巻、253頁

有坂氏が甲類と乙類の母音が違う母音だと考えたことがここでもよく分かる。乙類の下にある記号で口蓋化を表そうとしても、キ乙類とケ乙類の母音が違うから相似より差の方が目立つ。故に服部氏はこの甲類の相似を表すのに、記号ではなく同じ母音を使用し口蓋化を「j」で表す。

ここまで服部氏の考え方は五母音説と一致するけれどもオ段に対しての意見が違う。五母音説の学者はオ段甲類が「u」と「o」の組み合わせから出来たと推定する。すなわち、新しい母音が発生せず二重母音であるとかんがえる。これに対して服部氏はオ段甲類乙類の母音が全然違う母音であると考え、オ段甲類が曖昧母音でありオ段乙類が半母音化した「o」であり「wo」になると主張する。

最後に七母音説の学者(安田喜代門)はオ段の甲類乙類の母音が同じでエ段とイ段の甲類乙類の母音が違うと思っている。

3-4 甲類乙類の差が口蓋化に基づく説の問題点

八母音説の母音体系の問題のために口蓋化が甲類乙類の差の原因として認められるならば、上代日本語の音節は次のようになる。

```

a ka ga sa za ta da na pa ba ma ya ra wa
i kji gjī si zi ti di ni pji bji mji ri wi
ki gi pi bi mi
u ku gu su zu tu du nu pu bu mu yu ru
e kje gje se ze te de ne pje bje mje ye re we
ke ge pe be me
o kuo guo suo zuo tuo duo nuo (puo buo muo) yuo ruo wo
ko go so zo to do no po bo mo yo ro

```

注(甲類p o, b o, m oの場合に古事記に一つの例しかなかったので甲類乙類の差の証拠にならない。2:奈良時代に「h」が「p」のような音であった。)

以上の表を見るとエ段とイ段の甲類乙類の差がカ行、ガ行、パ行、バ行、マ行にあるのにs, z, t, d, n, r、つまり歯茎音、の後にその差が現れない。だから元来歯茎音の直後に甲類乙類の差があったかどうかまだ明らかではない。

差がない理由が三つ考えられる:1)

- 1 口蓋化があっても対立がないこと。「i」が歯茎音の後で来ると前の子音が口蓋化することが当然である。だから口蓋化しても音声的に対立にならない。
例:〔si〕の発音が/sji/, 口蓋化したら〔sji〕になり発音が/sji/で、変わらない。
- 2 Cuy/Cey (C=子音、uyは乙類iでeyは乙類e)の場合に「uy」と「ey」が円母音であった。というのは、口蓋化が不可能であること。
例:乙類シをローマ字で記すと「suy」になる。子音の後で出て来るのが口蓋化させる「i」ではなく円母音「u」であり口蓋化が起ころなかった。
- 3 「i」と「e」の前の子音がもう口蓋化していたこと。

第三図:ローマ字で記した平家物語

```

m1 Qiyomori cō to mōxita hīro no guiōgui no fu-
fōna coto uo noxeta monc de gozaru. Sate fona
Qiyomori no [xcnzō]uat Qunmu renvō cūai na
A 3 cū-

```

このテキストに「xcnzō」という言葉が出て来る。これは「戦争」の当時のローマ字の表せであった。ここの「sensou」の「s」がその時に「x」で表記されて/sj/と発音された。というのは、そのとき/se/と/sje/の違いがなく/sje/しかなかった。

そうすると日本語の音節が三つの範疇に分けられる。甲類、乙類とこの差がない音節。甲類乙類の差がない音節の発音がどうになるかと言ったらサ行、ザ行、タ行とダ行のエ段とイ段の発音が以上の資料によれば甲類の発音と近いと考える。ただナ行とラ行の場合にそれが明確ではない。

1) 「The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean」 J. B. Whitman, 1985, Harvard.

4 母音の変化

母音の変化が二つの現象に分けられる：母音交替と母音転成。
通時的に先ず母音交替続いて母音転成を取り上げたいと思う。
注(後述は主に松本氏の研究に基づく。)

4-1 母音交替

母音交替とは

母音交替というのは一つの母音が同じ位置で違う母音に変わることである。特殊仮名の使い方或いは甲類乙類の差の研究とともに、母音交替という現象が発見された。

現代の日本語にも母音交替の跡が多数残っている。名詞の場合、単独語は複合語になると単独語の末尾音節の母音が違う母音になる例がある。例えば「*amado*」(雨戸)の場合に「*ame*」(雨)の最後の母音「*-e*」が複合語になったら「*-a-*」になる。

母音交替は三つの範疇に分けられる。

イ *a-e* *ama-ame* (雨)

ロ a) *o-i* *iso-isi* (磯-石)

 b) *u-i* *kutu-kuti* (口)

ハ *a-o* *kura-kuro* (暗-黒)

この例の右側の方は単独語として使用出来る。左側の形が複合語の中だけ現れるので、左側の形が右側の形の交替として発展したと長い間思われていた。しかし現在はその反対だと認められている。その理由を後で説明する。

u-i という母音交替は *o-i* 交替の二次的な交替として認められている。次の甲類乙類の現れる環境の問題について出る例で明確になる。*u-i* の交替が *o-i* の二次的な交替であるとしたら、「*u*」と「*o*」の発音は近かったと思われる。

a-e、*o-i* (*u-i*) の交替と違い *a-o* の交替の場合、音声的に母音だけではなく音韻的に意味も変わっていく。例えば「*ama*」が「*ame*」に変わっても音韻的に意味が変わらない。しかし *a-o* 交替の場合に「*kura*」が「*kuro*」に変わると意味は同じではない。もう一つの違いは *a-e*、*o-i* (*u-i*) 交替の場合、末尾音節に出て来る母音だけが変わるのに、ある *a-o* 交替の起こる単語では両方の母音が変わっていく。例えば「*pasa*」が「*poso*」になる。これは母音調和(後述)と関係があり、もし第一音節の母音がオ段乙類の母音に変わったら第二母音も同じオ段乙類に変わらないといけないと考えられている。

母音交替のことを十分理解出来るために母音交替(の甲類乙類)が現れる環境や単語にある母音調和を研究しよう。

5 母音交替の甲類乙類が現れる環境

問題を入れる前に例を使いながら様々な音韻学上の専門用語を紹介しよう。

例：CVCV (V=a, o, u) - CVCV (V=e, i)

(C=子音、V=母音)

左側の形の末尾母音はいつも *a*、*o*、*u* で終わる (*o* は甲類でも乙類としても現れる)。これを連結形式及び開き形(無標形/基本形)という。右側の形は乙類の *e* と *i* で終わり断止形式及び閉じ形(有標形/派生形)という。乙類の *e*、*i* が基本母音 *a*、*o*、*u* の交替母音である。

では、これから2音節形式と単音説形式に分けて母音交替の例を挙げる。ただし今回は開き形の音節構造および甲類乙類の別も付け加え、音節構造ずつの例を挙げるものとする。

注(便利のために甲類を小さな1、乙類を小さな2で示す)

5-1 *a-e*乙

a) 2音節形式

音節構造：*CaCa*、*CuCa*、*CiCa*

例：*ama -ame*₂ (雨)

puna -pune (舟)

ina -ine (稲)₂

CaCe と *CoCa* という音節構造形式はあまり現れない。*e* と *o* は *a* の交替母音であり、原則として基本母音と交替母音が同じ語幹に現れないので、以上に書いてある音節構造が珍しいである。しかし全くないわけではない。

理由としてその語幹が複合から出来たこと、二次的な転化であることそれとも新しく出来た語幹(奈良時代以降)であると考えられる。

b) 単音説形式

複合語はないので、語幹母音と末尾母音が一致し、使い分けも曖昧になる。例えば次の例の中で「shiraka」の「ka」と「hata」の「ta」は語幹母音なのに末尾母音の位置に現れる。

例: ka-ke (毛) shira-ka (白髪), kami (髪)。

ta-te (場所表す接尾辞) ha-ta (端), omo-te (表)

5-2-1 o-i乙

a) 2音節形式

音節構造: CoCo, CiCo, CuCo, (CaCo)。

この音節構造の中の「o」の位置は区別のない「o」であり、甲類も乙類も現れる。

例: iso-isi (磯-石)

moro-mori (杜)

kuro-kuri (黒-渥)

awo-awi (青-藍)

b) 単音説形式

例: ko-ki₂ (木)

po-pi₂ (火)₁₂

5-2-2) u-i乙

a) 2音節形式

音節構造: CuCu, (CaCu)。

例: kutu-kuti (口) : kutu-wa (口輪)

kamu-kami (神) : kamu-kaze (神風)

CuCuとCaCuという音節構造は、o-i交替の以下に書いてあるCuCoとCaCoのそれぞれの二次的な転化である。「o」は「a」の交替母音で同じ語幹に現れることは規則に反するためにこのような例は例外であると考えている。CaCuはCaCoの二次的な転化で同じく例外である。

b) 単音節形式

例: tu-ti (助数詞) : putatu (二つ) - patati (二十歳)

mu-mi₂ (身) : mu-ne (胸) - mi (身)₁₂

5-2-3 a-o

以上の交替母音e, iと違って、ここに出て来る交替母音oは乙類だけでなく甲類や区別なしの現れ方もある。(オ段の甲類乙類の有り方がはっきりしていない音節はとりあえず区別なしとすることになった。)

a) 2音節形式

音節構造

1) CaCa-CoCo pasa (狭) - poso (細)

2) CuCa-CuCo kura (暗) - kuro (黒)

3) CiCa-CiCo pira (開) - piro (広)₁₂

b) 単音節形式

ka - ko

Ca-Co

この単音節は、複合語のなかだけ使われる。例えば「kare」(彼)の「ka」と「kono」(此)の「ko」。

CaCa-CaCoという交替はない。これも母音調和と関係があるため後に説明する。

CaCo/CoCaという音節構造はあまりない。しかし現れるCaCoとCoCaの音節構造は複合形式にしか現れない音節と二次的な転化に分けられる。

例: a) CaCo

複合形式 ato (跡) < a (shi) (足) + to (処)

二次的転化 amo (母) < omo (母)

b) CoCa

複合形式 poka (外) < po (=pa端) + ka (処)

二次的転化 oja (親) < ojo (老)₁₂

オ段甲類と乙類の現れ方は有坂氏によれば次のようになる。

a) 2音節形式

1 2) 前述の例が松本氏の「古代日本語母音論」から書き写した。

(8)

- 1) CaCa-CoCo:乙
- 2) CuCa-CuCo:甲
- 3) CiCa-CiCo:甲/乙

以上の1) - 3)は有坂法則と呼ばれる。CiCa-CiCoの場合にoが甲類であるか乙類であるか、前に出て来る音節Ciとは関係がないようである。松本氏の「古代日本語母音論」に挙げられた例ではあまり明らかではないが次の例を見ると第二音節の甲類乙類の有り方は第一音節に現れる甲類乙類に一致しない。

例: pira (開・平) - piro (尋・広)の交替の場合にpiroが「万葉集」に万葉仮名で<比呂>と書いてある。比は甲類なのに呂は乙類である。

b) 単音節形式

単音節の場合にはオ段の甲類と乙類の使い分けに対して、色々な法則がある。単音節形式、助詞と代名詞の場合には乙類が多い。複合形式の中に現れる付属語の場合には甲類が多い。

5-3 動詞の母音交替

今まで名詞に現れる母音交替を取り上げたが動詞にも同じ現象が起こる。ここも名詞と同じように、範疇に分けて説明しよう。

5-3-1 a-e交替

この交替は「四段活用」の動詞の場合によく見られる。基幹の末尾母音-aが「形容詞・名詞的」語幹であり、交替の結果で新しく出来た基幹の末尾母音-eは動詞的な派生形である。「下二段活用」の動詞がa-eの交替によって、「四段活用」から出来たものである。もしe乙類が基幹のaと形態音素たるiの組み合わせから新しく出来たとしたら、「四段活用」と「下二段活用」の動詞は同じ起源から発生した可能性がある。「四段活用」のa幹は自動的であり(a幹は他動的ならばe乙幹は自動的か受動的になる。)
「下二段活用」のe乙幹は他動的である。

音節構造

名詞的形式と同じくCaCa, CuCa, CiCa。他動詞-自動詞という区別がある
「四段活用」の動詞の場合だけ第一音節にも現れることがある。

例: 自・他動詞の区別がない動詞
(下二段活用)

aka (赤・明) - ake₂ (明)
kura (暗) - kure (暮)
ija (弥) - ije (癒)

自 - 他
(四段活用)

kaka - kake₂ (懸)
muka - muke₂ (向)
ika - ike₂ (生)
soma - some₂ (染)

5-3-2 o(u) - i

この交替が「上二段活用」の動詞の場合によく見られる。しかし、a-e交替に対して同じような交替関係はないわけである。「上二段活用」の動詞のo(u)幹はa幹と違って単独で現れるのが珍しく、それに生産性もほとんどない。その結果o(u) - iが残っている動詞が少ない。

a) 2音節形式

音節構造

CoCo, CuCo(u), CaCu, CiCo, CaColはない。

例: oko - oki₂ (起)
sugo - sugi₂ (過)
tuku - tuki₂ (尽)
nagu - nagi₂ (和)

b) 単音節母音

posu (干) - pi₂ (乾)

5-3-3 a-o

(oは甲類、乙類それとも区別のない母音として現れること。)

13) 「古代日本語母音論」、松本氏、59頁

動詞の発生の過程¹⁴

a活用=a(四段) ~ o活用=o(カ変、サ変の古形)

v

v

a-i活用=e乙(下二段) o-i活用=i乙(上二段)

カ変とサ変とは四段活用の変則動詞である。四段活用の場合に現れないoが変則動詞「来る」の未然形に現れる:k o-n a i。

これは動詞の発生の過程をあらわしている。初めにa幹があってこれにiを付けて新しくe幹が出来た。これはaの交替母音である。同じa幹から交替母音oとともにo幹が発生した。それで、この新しく出来たo幹から交替母音としてi幹が発生した。

a幹だけが生産的でありo幹は生産性がないから、o-i交替する動詞が少ないのである。もう一度交替を受ける単語の音節構造を見てみよう。

a-e: CaCa, CuCa, CiCa

o-i: CoCo, CuCo, CiCo

a-e類の構造をo-i類の構造と比べたらa-o交替の音節構造が見えてくる。

a-o: CaCa, CuCa, CiCa, Ca→CoCo, CuCo, CiCo, Co

a-o交替はa-eとo-iの反映であるため、iはaの交替母音ではありえない。

例: s a r a (去) - s o₂r o₂ (反)
 t u t a (伝) - t u t o₁ (t u t u) (包)
 i k a (生) - i k o₂ (憩)

名詞の場合と同じくここも意味が違って来る。

6 母音転成

前述のように母音の変化は二つの現象に分けられる。一つは母音交替と呼ばれる現象であり。もう一つは母音転成である。

母音転成というのは二つの母音が一つの母音に合流することである。日本語という言葉は元来CVという音節構造でありVVという音節構造はその時ありえないわけであった。それでも音節構造がVVという状態になったら、その二つの母音が合流する。この母音の合流がどのように行われたかは五母音節とともに説明した。

他の学者(有坂氏、大野氏、坂倉氏長田氏)は母音の合流より、「i」の文法的な機能を強調する。しかしこの「i」の文法的な作用には脱落と挿入の二つが考えられる。「さけ」を例として使って説明しよう。脱落の場合にs a k eが基本形とす。元の形に戻すとs a k a iになる(eがa iから出来たものそれとも発音であったから)。これで複合語を作るとs a k a - i - t u k iになる。iが脱落してs a k a t u k iになり複合語にしか現れないs a k aという形が出来た。

6-1 母音転成の現れ

脱落より挿入の方は大幅に認められている。挿入の場合にどうなるか見てみよう。

ここではs a k aが基本形と見られ複合語にしか現れない。単独語になるために接尾辞たるiを付ける。例えばs a k a t u k iから基本形s a k aを取ってiを付けて単独語として使われるs a k a i(発音は/s a k e/)になる。

s a k aはs a k eより複合語の中でもよく現れ、s a k eよりs a k aは基本形と見られ挿入の方が自然であると思われる。

しかし、このiは一体なんであろう。色んな意見が挙げられる。

大野晋によればこのiは接辞で、名詞語尾と動詞連用形を形成するもので、韓国語の「事」を表す「i l」それとも「有り」を表す「i t」に關すると推定する。

坂倉氏によればiというのは本来動詞的な意義を表す接辞で、名詞に付けると指示強調の機能或いは「スルコト・モノ」の意を表すとされる。

長田夏樹氏によればこのiは所有代名詞語尾である。¹⁵

すべての説に共通するは、語を独立させる接尾辞であることである。

6-2 エ段乙類の現れ

母音転成という現象が動詞、助動詞と形容詞の活用部に起こるエ段乙類で知られている。一番よく使われている例が「s a k e r i」である。これは「咲く」という動詞の完了形でありつぎのように発生した。

14) 「古代日本語母音論」、松本氏、57頁

15) 「上代日本語音韻の一研究」、蔵中進、126~128頁

「saki」は「saku」の連用形であり、「ari」というのは完了を表す活用部の終止形である。それで発生過程は「saki+ari」になり、「saki」の「i」と「ari」の「a」が合併して「e」になる。そうしたら最後の活用の形は、「sakeri」になる。以下に同じように出来た活用部が挙げられている。：の前は活用部の名前で、その後ろに

例がある。

a) 動詞・助動詞の活用部

- 1) 過去の助動詞：sake_ri
- 2) 推量の助動詞：saki_ke_ri
- 3) 過去推量の助動詞：kaki_me_ri
- 4) 「上一段活用」動詞の敬儀形：saki_ke_μ
- 5) 「四段活用」の命令形：me_su

b) 形容詞の活用部

- 1) -ke_ri, -ke_redo, ke_reba: kanashike_ri
- 2) -ke_do, ke_ba: kanashike_do
- 3) -ke_μ (推量) : kanashike_μ
- 4) -ke_ku : kanashike_ku

7 母音調和

上代特殊仮名遣いの研究と一緒に発見されたのは、母音交替だけではなく日本語にも母音調和があったということである。有坂氏と池上氏がこの現象を研究していたけれども、有坂秀世の「上代音節攷」に出る「有坂法則」といわれる音節結合の法則で有名になった。本当はこの法則が大体2音節形式に起こるオ段の甲類と乙類の現れ方であり三つに分けられる

第一則：CoCo 例：k_ot_o (言)
oは乙類 k_ok_or_o (心)

第二則：CuCo kumo_o
oは甲類 muro_o

第三則：CoCa sora
大体oは甲類けど例外が多い

ここには挙げないが多数の例を研究した結果から母音調和に出る母音は次のように分けられている。

調和する母音の音図

一類：オ列乙類	o _t	女性母音（陰母音）
二類：オ列甲類・ウ列音・ア列音	o _l , u, a	男性母音（陽母音）
三類：イ列甲類	i	中性母音

女性母音と男性母音の場合に、同じ単語の第一音節に一つの類が現れれば第二音節にも同じ類が現れると考えられる。しかし中性母音は中立であり、女性母音とも男性母音とも調和する母音である。この図を見るとイ列乙類、エ列甲類、エ列乙類という母音は調和する母音として出ない。なぜかということこれらの母音が語根に現れないからである。この理由は語根に現れない母音は新しく出来た母音であるからである。オ列甲類もいうまでもなくオ列乙類から出来た母音であるが、イ列乙類とエ列母音より早く出来たようである。これも五十音図にイ列音とエ列音よりオ列音の方が対立する音節が多い理由になると考えられる。オ列甲類も新しく出来た母音であるとする、奈良時代の前の調和する母音は次の姿を取る。

多音節に起こる母音：a, u, o乙類

単音説に起こる母音：i甲類

奈良時代までこの母音調和が守られていたが、新しい母音が出来てから母音調和が乱れてきたと考えられている。

8 甲類と乙類の使い分けの消滅。

平安時代に万葉仮名の使い分けがなくなり、甲類と乙類の使い分けもなくなってきた。七世紀以前に、p-, b-, w-と結合したオ段の甲類乙類は合流していた。七世紀まで存在していたmoの甲類と乙類が合流し、それから軟口蓋音のk-, g-や両唇音のp-, b-, m-以外の子音（即ちs-, z-, t-, d-, n-, y-, r-, w-）と結合してイ段とエ段の甲類乙類が合流した。その結果「古事記」以後の奈良朝の万葉仮名文獻にはキヒミケヘメコソトノヨロとその獨音節にのみ甲乙の書き分けが見られる。

八世紀末から九世紀の初頭にかけては、p-, b-, m-と結合していたエ段とイ段の甲乙類が合流すると共に両唇音p-, b-, m-以外の子音と結合していたオ段の甲乙類が合流した。ただ軟口蓋音のk-, g-に後接のオ段甲乙類だけが、平安朝初期の九世紀まで合流していなかった。¹⁶

エ段乙類とイ段乙類はそれぞれその甲類に合流した。そこで現代日本語のエ列とイ列は甲類と近いと考えられる。しかしオ段の場合に甲類の方が乙類に合流し、現代日本語のオ列は乙類に近いようである。

16) 「言語研究」96(1989)、40-41頁

参考文献

- 「古代日本語母音論」(上代特殊仮名遣の再解釈) 松本克己、1995、東京、ひつじ書房
- 「日本の言語学」第七巻、1981、東京、大修館
 - 国語仮名遣研究史上の一発見(石塚龍鷹の仮名遣奥山路について) 橋本進吉
 - 上代日本語の母音体系と母音調和、服部四郎
 - 上代の文献に存する特殊の仮名遣と当時の語法、橋本進吉
- 「日本語をさかのぼる」大野晋、1974、東京、岩波新書
- The languages of Japan, Shibatani, 1990, Cambridge, Cambridge University Press
- The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean, John Bradford Whitman, 1985, university Microfilms International Harvard.
- 「上代日本語音韻の一研究」(未確認音韻への視点) 蔵中進、1975、神戸、神戸学術出版
- 「日本語の母音組織と古代音か推定」清瀬義三郎則府; 言語研究96(1989) 23-42